〔千葉医学　92：247，2016〕

〔エッセイ〕

「編集後記」について

高　野　光　司

「ゲッティンゲン便り（X）」として“編集後記”について書いたことがある（千葉医学雑誌 79: 87，2003）。当時の編集後記には編集委員が勝手なことを（たとえそれが秀逸な論議であれ）雑誌の内容とは無関係に述べたり，さらに目に余る記載例もあり，やむなく書いた。

その後は，いずれの編集後記もそれらしく立派に書いてあるのだが，“論文の著者名”が気に入らないものが多かった。しかし，先輩面をして苦言を呈するのはどうか，と遠慮していた。

複数の著者がいるのに筆頭の著者名だけを挙げて「○○*先生*のご立派なお仕事」という具合に書いてあることが，しばしば見受けられた。複数の著者がいるときになぜ筆頭著者だけを上げるのか。本誌の投稿規定では，論文を引用する場合に，著者が2名の時は“AとB”，3名以上の場合には“Aら”とすることになっている。編集委員たるもの，範を垂れるべきだ。一般に著者名をあげるときには，名前だけを上げるのが普通であろうが，白澤委員のように，最終講義の著者を先生，ふつうの論文の場合には投稿規定にあるごとく，そして大学院生（お弟子さん?）の場合には“君”のように，正しい日本語表現をするのもよかろう。

編集後記で論文をほめるばかりが能ではあるまい。英語論文について，かつて，ある編集委員が「以上のような多彩な内容の中には，日本の読者を対象として書かれていて，おそらく英文で書いても意義の少ない論文も含まれていることが解ります。」と，批評していたのが，なつかしく思い出される。内容によっては，苦労して，nativeの，しかし医学と無関係の人をたよりに英語を書くより，論文を完璧なものにする努力をしたほうが良い，と思うが，如何。

白澤委員は最後に編集委員会からとして，投稿内容についてではなく，良質な英文原稿が必要なわけも書いておられるが，これは編集委員として当然な事柄であろう。

編集後記ではないが，ついでに申し上げると，教室紹介などで，著者名が教授になっている文の終わりに，“（文責○○）”として他の教室員の名前が入っているのをしばしば見た。文に責任のあるのは著者のほか何者であってはならないことは明白である。

教室紹介などで，筆者あるいは“文責”が，同教室の教授等のことを述べている場合に，敬語を使っているのは，正しい日本語表現ではない，と言いたい。

これもついでで申し訳ないが，時に著者名が20人を超すことがあり，なかなか理解に苦しむところである。たくさんの著者の一人になっているが，その文を理解していなかったり，読んだこともなかったりする人がいなければよいが……。言うまでもないことだが，論文の著者は，その内容に責任をもって関わったもの“全員”，“だけ”であるべきである。

ゲッティンゲン大学医学部教授（元病態神経生理学部長）
Prof. Dr. Kohsi Takano: About “EDITOR’S NOTE”.
(ehmal.), Abteilung fuer Pathoneurophysiologie, Universitaet Goettingen, Germany.
263-0005　千葉市稲毛区長沼町25-1　スマートヴィレッジ稲毛A-1104
Phone & Fax: 043-301-3236. E-mail: kohsitakano@gmail.com